たね通信
2018年９月 No.46
発行 地域生活ケアセンター
小さなたね
【医療法人にのさかクリニック】

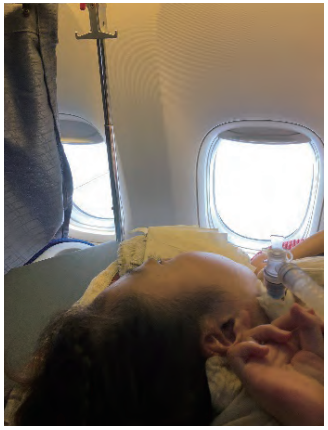
人間の共感力

所長 水野 英尚

先日の休日、久しぶりに帰って来た息子と私たち夫婦、そしてストレッチャーに乗った娘の４人で近くの飲食店に行ったときのことです。事前に連絡はしていたものの、人工呼吸器を着けた娘の来店に、最初は店内に戸惑いの空気が流れているのを感じました。ところが、座っていたお客さんがさっとスペースを空けてくれたり、店員さんが優しく誘導してくれたことで、店内の固まっていた空気が、ゆるやかに溶けていくのが分かりました。さらに、私たちとすれ違いながら店を出ていく家族のおばあちゃんが、ストレッチャーの娘に深々とお辞儀したり、中年の女性が微笑んで娘の頬をさすりながら「がんばってね」と声をかけてくれたり、何とも心温まる思いをさせてもらいました。

京都大学総長でゴリラ研究の世界的権威でもある山極寿一（やまぎわじゅいち）さんは、人間社会とサルやゴリラ社会との相違を、「見返りを求めない家族の論理と、助けたら助けられるという互酬性が基本のコミュニティ論理の、両方を持っているのは人間社会だけ」と言っています。つまり、私たちの社会が他者をいたわり配慮するよう社会形成がなし得ているのは、人間には「共感力」が備わっており、互いに向き合って、会話をしたり労働をしながら「共感力」を高めてきたことで、人間は争いを回避して社会を営んでいると山極さんは言います。

冒頭のような心温まる出会いばかりでなく、障がいのある人たちを冷たく差すような視線で、見られることの方が多い社会だと思いますが、それでも自分の住む町に出来る限り出て行き、出会うことをしなければ、変化は期待できません。きっと誰の心にも備わっている「共感力」を信じ続けていきたいと思います。


飛行機に乗って，いざ東京へ！

小さなたねの物語が描かれたステンドグラス（グラスアート TAKAMI 製作・寄贈）

たねスタッフのつぶやき

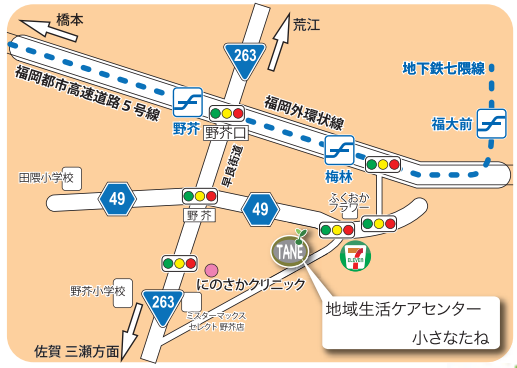
夏の暑い日、伊勢神宮へ行ってきました。娘の陸上競技の応援に行ったのですが、外宮・内宮とゆっくり廻るつもりが、なんと気温39・9度。あまりの暑さについつい足が速くなりながらも、木が生い茂った神宮は、暑い中でもひんやりとした空気が流れ、五十鈴川が太陽の光を浴びてキラキラ光っていました。神秘的な空間を堪能し、たくさんの願い事をして競技場へと向かいました。２度目は涼しい時に行こうかな。勿論美味しい「赤福」をお土産にしよう。

西本昭子（看護師）

後記

猛暑のせいか今夏はムカデに三度遭遇した。一度は熊本の実家で、咄嗟に母が踏んで体がちぎれ、孫を凍りつかせた。母は庭木の毛虫も剪定ばさみでチョキンと切る。以前、母は幼少の孫に、そのボトンと落ちた毛虫を箸で拾って袋に詰めるよう頼んだ。庭で燃やすから、と。うごめく半身の毛虫たちは、娘の脳裏におぞましい記憶として刻まれた…。

昔聞いたムカデ話――ムカデの母さんが子どもに買物を頼んだ。子「うん行ってくる」。ところが帰りが遅い。心配になった母さんが探しに出ようと玄関へ。すると子はまだ靴を履いているところだったとさ。（E）



医療法人にのさかクリニック
地域生活ケアセンター 小さなたね
〒814－0172 福岡市早良区梅林６-23-３
電話 092－874－3051 FAX 092－874－3052
E-mail：chisanatane@tune.ocn.ne.jp

ソーシャルイノベーション

去る9月8日に東京の青山学院大学を会場にして開催された「日本財団ソーシャルイノベーションフォーラム2018」での分科会、「『自分で決める』ってむずかしい」に登壇する機会を頂きました。同じく登壇者として、熊谷晋一朗さん（東京大学先端科学研究所准教授・医師）、國分功一郎さん（東京工業大学教授・哲学者）、さらにそこに私の娘（ひかり）が重症心身障がい当事者として加わるという画期的な取組みでした。

そもそも、「言葉」を発することの困難な娘が登壇って…？と思われる方がいらっしゃるかもしれません。今回の分科会はまさに、そうしたコミュニケーションが困難とされる人たちの「意志」とは何か、医療や福祉でよく言われている「意思決定」とは何か、そもそも個人に限定された「意志」などあるのだろうか…等々、気鋭の研究者たちとのセッションは、まさに刺激的で創造性に溢れた内容であったと思います。会場の百数十人の聴衆は、前方の大画面に投影される障がいを持つ当事者の表情に集中して向かい合い、一言も「言葉」を発さなくても、理解し合い繋がる不思議な世界に引き込まれているようでした。

今回、熊谷さんの提案で「プロセスレコード」（精神障害のある方たちの治療で使う手法）を用いました。会場の全員が1枚のA4判の紙を手にして、「ひかりさんが知覚したこと」「周囲の状況」「私の解釈（思考）と感情」「分析」という4つの項目に記入します。熊谷さんからの「私たちは、障がいのある人を直視しないことが多い。瞬間的に見るには見るが、すぐ目をそらしてしまう。だから、こうした取り組みが大切なんです」、さらに「正解などないんです。皆さんが感じたこと、そのままを書いて下さい」との呼びかけにより、分科会がスタートしました。

私に与えられた前半では、父親として、また教会の牧師（前職）として、そして支援者として、何を感じて取り組んできたのかを語りました。その中で、娘の幼少期から現在に至る短い動画を作成して、身近に居る者として「言葉」を発しない彼女の思い（願い）を表現してみました。

分科会後半では、哲学者の國分さんが「意思」について

たねのスタコラ（ツフム）

仲良しいとこ？

従姉のN子さんが入院したと聞き，すぐにお見舞いに行った。ナースステーションに立ち寄ると，本人が今寝ているので意思確認が出来ない，面会は出来ませんと断られ，仕方なく待つことにした。2時間待っても駄目だったので，一人暮らしのN子さんのことをいつも気にかけ今回の入院の手筈を整えてくれた別の従姉のT子さんに来てもらい，確認を取り，ようやく病室へ入ることができた。カーテン越しに覗くと，ぽっちゃり元気だったころの面影は全くなく青白く痩せせたN子さんがベッドにいた。N子さんは痩せた腕を上げてピースをしてくれ，こわばっていた私を和ませてくれた。

元気だったころはおしゃべりが止まらないくらいの明るい女性だった。痩せていたが美人な顔立ちはそのままで，おもわず「N子さん，変わらずきれいやね，シミもしわもひとつもないよ。ほんときれい！」の言葉が出た。すると，私に向ってか細い声で，「あのね……顔を洗わないことよ」。えーっ！「10日に1回くらいでいいと」と言う。うーん，いつか女性芸能人が，きれいの秘訣は顔を洗わないこと，と言っていたのを思い出した。

するとN子さんが手を伸ばして，何かを取ってくれとの合図。T子さんが引き出しから，これね，と化粧品道具の中の眉墨と手鏡を取り出し本人に渡した。やっとのことで眉墨を手に持つと，私が構えた手鏡に向かって筆を動かし始めた。しかし筋力が落ちた手は眉までなかなか届かず，私たちは「あー，そこは鼻よ。あーちがう，そこはまぶた」と言いながら，福笑いの顔になってしまい，おもわず

渋谷　瑞恵（介護スタッフ）

小さな夏祭り 2018

夏の暑さに負けまいと，毎年恒例の夏祭りが開催されました。お馴染みのそうめん流し・かき氷・スイカ割りに加えて，太鼓を手作りし，ラテンのリズムに合わせて，みんなで踊りました。最後はビンゴ大会で「○○番！」に一喜一憂しながら，「ビンゴ！」の声に歓声が上がっていました。

ボランティアして下さった
・純真学園大学看護科の皆さん
・福岡大学看護科の皆さん
本当にありがとうございました。

話されました。まず「〝意思〟と〝意志〟」の違いについて、「意思」とは法律用語で、私たちが使うのであれば「意志」と書くのが正しいこと。そして、〝個人の意志〟と言うときの〝個人〟が、色々な関係性を切り離してしまうということ。つまり「意思決定」と言うとき、「あなたが決めることだから、私は関係ない」という構図に陥る危険性がある、ということを指摘されました。そして、私たちが何かを決めるときには様々な関係性や環境に影響を受けていて、そもそも完全に独立する「個人の意志」など存在するのだろうか、「私たちが支援をすることができるのだとしたら、その人の〝欲望〟（〜がしたい）を支援する〝欲望支援〟なのではないか」との國分さんの提案に、何気なく使っている「言葉」の意味と、それに伴った行動の在り様が鮮明にされた瞬間でした。

さらに國分さんは、「私たちが〝意志〟と言うとき、その言葉のもつニュアンスが非常に固く、関係を切り離すような気がする」と言われました。確かに「意志」は本人以外の何者も入り込む隙間を与えない冷たさを感じますが、「欲望」は通常あまり良い意味で使われることが少ないものの、私たちの中に必然と沸き起こる感情も含め熱量を感じます。そして、「意思決定支援」を「欲望形成支援」にしてはどうかとの提案は、法整備や制度設計だけが優先され、血の通わない冷たい関係を築くのではなく、そこにある人との関わりや繋がりを大切にしていく発想だと思いました。

ソーシャルイノベーション 2018

「ソーシャルイノベーション」は、社会問題に対する革新的な解決法を導き出す取組みです。今回の分科会では、たった一人の重症心身障がい当事者に向き合い、「意志」や「自立」という壮大なテーマと対峙しましたが、私たちにとっての変革は、小さなところや弱いところからだと私は考えています。

オススメ本

『ゴリラからの警告「人間社会、ここがおかしい」』

ゴリラ研究の世界的権威であり，京都大学総長でもある著者が，サルやゴリラなど霊長類の社会ルールと照らし，複雑化しているように思える人間社会が近年ますます「サル化」しているのではないかと指摘。考えさせられる。

山極　寿一 著
（毎日新聞出版／1,400円＋税）

吹き出しそうになった。

書いてあげようかと何度も言うが，「いや！」と絶対に渡さない。その姿に笑いをこらえていたが，「ちがう，ちがう，そこじゃない」と繰り返し，とうとう私は笑いが止まらなくなった。

それから３週間がすぎたころ，Ｎ子さんは亡くなった。棺に横たわったＮ子さんは本当にきれいだった。病院嫌いだったため，受診した時にはもうがんの末期で手遅れだったそうだ。家に帰りたいと訴え，一人暮らしを支えるために訪問看護師さんや嫁に行った娘が懸命に２カ月在宅で頑張ってくれたが，最期は自宅での看取りはできなかった。わがままな人だったが，憎めない可愛いひとだった。

それからちょうど１カ月後，Ｎ子さんをずっと支えていたＴ子さんもあっけなく，がんで亡くなった。あの時元気そうだったのに……私は耳を疑った。体調が悪くなって１カ月もなかった。二人ともまだ60歳代。寂しくなったなー